

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	総合医療・健康科学領域 精神・発達医療学教育研究分野 氏名 加藤 澄
指導教授氏名	中村 和彦
論文審査担当者	主 査 照井 君典 副 査 下田 浩 副 査 井原 一成
(論文題目) Toward mapping pragmatic impairment of Autism Spectrum Disorder individuals through the development of a corpus of spoken Japanese (日本語話し言葉のコーパス開発を通じた自閉症スペクトラム障害の語用論的障害のマッピングに向けて)	
(論文審査の要旨) 自閉症スペクトラム障害(autism spectrum disorder: ASD)の中心となる症状は社会的コミュニケーションの困難であり、この障害は一般に語用論的障害(pragmatic impairment: PI)とみなされている。PI は社会的状況の中で言語を適切に使用することに困難を持つことである。先行研究はPI が神経学的、認知的、言語的、そして知覚運動性における機能不全といった複雑に絡み合った要因から引き起こされることを報告しており、PI の全容を明らかにするには、これらの要因を取り入れた複合的見地からのアプローチが必要である。この目的を達成するためには、まずPI そのものの包括的マッピングが必要不可欠である。 本研究では、日本人 ASD 児/者の話し言葉におけるPI の包括的マッピングを実現するために、Systemic Functional Linguistics の枠組みからシステムネットワークを作成し、このシステムネットワークを基にPI の特定を想定したアノテーション・スキームを構築した。このアノテーション・スキームに基づいて、「the Corpus of ASD + Typically Developed Spoken Language」を構築した。本コーパスは、ASD 被験者 186 名及び定型発達児/者 106 名による 1187 の音声記録のテキストからなり、107 万形態素数を収納している。さらに、コーパスを機械学習させることにより自動アノテーションを試み、約 87% の正答率を達成した。また、なぜPI が起こるのかを神経認知機能の側面から解明を試みる例として、ASD のPI として特定された日本語の終助詞を例にその解明プロセスを例示した。本研究で構築したシステム・ネットワークおよびアノテーション・スキームは、他言語にも適用できる汎用性を有するため、他言語への適用が実現されることにより、cross-linguistic PI の研究が可能となる。本研究は、言語面の知見から ASD の診断に寄与する可能性を開くものであり、学位授与に値する。	
公表雑誌等名	PLoS One. 2022 Feb 25;17(2):e0264204.